「方」の日本漢字音ハウ・ホウ続貂

佐々木　勇

一、　問題の所在
二、　「方」についての中国の韻書・字書の記載
三、　日本の古訓点資料に見られる「方」字の音注
　Ⅰ日本呉音資料における音注の実態
　　1字音直読資料（呉音系）
　　2訓読資料（呉音系）
　　3字書・音義（呉音系、呉音読部分）
　　4「方」の日本呉音における音形・声調
　Ⅱ日本漢音資料における音注の実態
　　1字音直読資料（漢音系）
　　2訓読資料（漢音系）
　　3字書・音義（漢音系、漢音読部分）
　　4「方」の日本漢音における音形・声調
四、　日本漢字音における「方」字の音形・声調
五、　従来の研究の問題点の検討
六、　むすび

一、　問題の所在

「方」字の日本漢字音に「ハウ」「ホウ」の二形が存し、その両音は、意味の相違によって使い分けられていることは、つとに指摘されるところである。

①池上禎造「「方」字の合音用法」（『島田教授古稀記念国文学論集』〈関西大学国文学会。一九六〇年〉[1]所収）

②福島邦道「四方なる石」（「国語学」四六輯[2]。一九六一年）

右の二論文によると、

A四角の意と医方の意―ホウ。去声（熟語の下では上声の場合もあり）。

B右以外の意――――ハウ。去声。

という原則であることが知られる。

このうち、「ホウ」は、中国の韻書・字書の反切・同音字注からは導かれない音形であるため、わが国で生じた音形であろうとされている[3]。

右の論の根拠となっている資料は、平仮名文献や室町時代以降の抄物・キリシタン資料・国語辞書などが中心である。右の論文執筆時としては資料の制約があったため、やむをえないことであるが、日本漢字音を知るためには、より古く、より純度の高い漢字音資料が求められる。今日では、その要求にこたえる資料として、多くの訓点資料が使用できるようになってきている。この訓点資料によって、より早い時期の「方」字の付音例を集めることが可能となっているのである。

「方」への初期の日本漢字音の加点例を見ることによって、従来説かれてきた使い分けがどこまで遡れるものかを知ることができる。さらに、その作業によって得られた例を通覧して、ハウ・ホウの使い分けが日本において生まれたものか否かを考えることも可能であろう。

また、右の両論文中で挙げられている用例の中には、ハウ・ホウの使い分けの原則に反する例も少なくない。この、原則に合わない例が見られる原因を考えてみる必要がある。

以上、古訓点資料を用いて「方」字のわが国での音と意味との関係を捉えなおしてみることが、本稿の目的である。

二、　「方」についての中国の韻書・字書の記載

前引の①論文中には、中国の韻書・字書には、「方」をホウと読む根拠は見いだせない旨が説かれている。まず、この点を確認しておきたい。

経典釈文（通志堂本による。〈　〉内は注、以下同じ。）

方命〈略〉徐云鄭王音放〉（尚書）　方良〈上音罔〉（周礼）　方與〈上音房〉（春秋左氏）　方羊〈蒲郎反〉（春秋左氏）　相方〈如字又甫往反〉（荘子）　方〈音傍〉（荘子）　方〈音舫〉（爾雅）

大廣益会玉篇

方〈甫芒切法術也四方也説文併船也〉

王仁煦刊謬補欠切韻

方〈府良反道也法也〉（平声）　（その他『十韻彙編』所収切韻類は、同じく「府良反（平声）」とする。）

宋本廣韻

方〈四方也道也比也類也法術也亦官名府良切十三〉（平声）方〈方與縣名〉〈房〈符方切〉の小韻字。平声）

集韻（上海古籍出版社版）

方〈分房切〉（平声）

方〈方與縣名〉〈房〈符方切〉の小韻字。平声）

その他、『康熙字典』所引の『唐韻』『韻会』なども陽韻の反切のみである。

右に見るように、中国撰述の韻書・字書には、陽韻・平声の反切・同音字注しかない[4]。したがって、「方」は、現在推定されている中国中古音で、―iang の音（開音）であることが確認される。この点は、本邦撰述の字書・音義でも同様である。

高山寺本『篆隷万象名義』

方〈甫芒反〉（一帖八ウ・五帖八〇オ）

天治本『新撰字鏡』
方〈四方也（略）府良反〉（六二〇頁）
醍醐寺本『法華経釈文』
方〈府良（亡）反鄭玄云方名東西也〉（上一四オ2）
醍醐寺本『孔雀経音義』（天永二年写本）
方〈音府亡反所也類也併也法術也〉（上一一七オ8）
小川本『孔雀経単字』鎌倉初期写本
方（平軽）〈符方切平陽方與縣名又府良切平陽四方也道也正也比也類也法術也〉（上165）
観智院本『類聚名義抄』
方〈府良反〉（僧上八五2）　方〈甫方反〉（僧中三〇7）

以上、現存する中国・日本の韻書・字書・音義には、日本漢字音でハウとなる音注ばかりであり、ホウとなる音注は見いだせなかった。その、ホウの音がわが国の文献に散見するために、これまで問題とされてきたのであった。

三、日本の古訓点資料に見られる「方」字の音注

高松政雄「法華経音義付載「両音字」についてのノート」（「岐阜大学教育学部研究報告　人文科学」第25巻。一九七七年）は、心空『法華経音義』（一三七〇年）の「両音字」の中の「方ハウ・ホウ」を、「（D）我が国的呉音・漢音上の両音字」の内「呉音内のみの場合」に位置づけている。しかし、その証明は省略されている。また、同論文は、呉音読中心の法華経音義についての考察であるため、漢音でハウ・ホウの読み分けがあったのかどうか不明な点が残る。

そこで、これらの点を確認するため、以下に、古訓点資料の「方」の音注を整理してみる。その際、呉音・漢音の別による相違を見るために、呉音資料・漢音資料を分けて記述することが必要となる。

I 日本呉音資料における音注の実態

本節では、呉音読を主とする訓点資料の、「方」字に対する音注加点例を、加点の古いものから並べてみる（挙例は、従来の研究との比較のため、先のA・Bの意味別におこなう。A・Bどちらかが欠けている資料は、その意味の用例が無いことを示す。以下同じ）。

1 字音直読資料（呉音系）

石山寺本『仏説六字神呪王経』保安元年（一一二〇）点[5]
A呪方（去）道術（62）
西教寺本『法華経』院政初期点[6]
A経（去）方（上新濁）（巻六）
B一方（去）（巻四）
聖衆来迎寺本『法華経』院政期点[7]
A順（平濁）方（去）治（上濁）病（平濁）（巻二）　方（去）薬（巻六）
経（去）方（上）（巻六）

B東（去）方（上濁）（巻一）　方（去）便（巻二）
高知安田八幡宮本『大般若経』鎌倉初期点[8]
A方圓（巻五七・四九三）
方（去）整（平）（巻三八一）　方（去）正（巻三八一）
B観（平）方（去）三摩地（巻四〇九）
親鸞筆『観無量壽経』鎌倉初期点
A八（入急）方反（去）（一五2）　方（去）面（平）（一五2）
B十（入濁急）方（去）（八7）　西（去）方（上）（一一1）　東（去）方（上濁）（⑨6）　以下、すべて去声または上声
東京大学国語研究室蔵『大般若経』建長六年（一二五四）点巻一
B西方（上）（222以下8例）　東方（上濁）（244以下8例）　南方（上濁）（314以下6例）
真福寺本『仁王経』弘長三年（一二六三）点
A医（上）（去）方（上）（去）（下巻）　不住方（去）不離方（去）（上巻）
B於方（上）便（下巻）　中（去）方（上濁）（下巻）
東寺本『仏説六字神呪王経』文永十一年（一二七四）点[9]
A呪方（65）
高山寺蔵『大方広仏華厳経』〈重文一11〉鎌倉中期点
B方（去）御（巻十二）
高山寺蔵『大方広仏華厳経』正安二・三年（一三〇〇・一）点
A方（去）圓（巻二十五）　医方（上）（巻二十七）
真福寺本『仏説六字神呪王経』鎌倉後期点
A呪方（65）
龍門文庫蔵『阿弥陀経・観無量壽経』鎌倉後期点
B西方（阿12）　他方（阿27）　東方（上新濁）（阿65）　以下いずれもハウ。
龍門文庫蔵『法華経』巻六南北朝期点（116・308・1）
A方藥
東寺本『仁王経』南北朝期点[10]（282函7号）
A医（上）方（去）（下巻）
B他（上）方（上）（上巻）　東（去）方（上濁）（上巻）　中（去）方（上濁）（下巻）

以上、Aの意味には、ホウの加点例しか見られない。Bの意味では、出現例は多いが音注加点例が少なく、比較的詳しく付音している資料にハウの加点が見られる。声調は、A・Bいずれも去声である[11]（ただし、上接字の声調の影響で上声になる場合もある）。

2 訓読資料（呉音系）

石山寺本『法華経義疏』長保四年（一〇〇二）点
A方圓（序品末）
高野山光明院本『蘇悉地羯羅経』寛弘五年（一〇〇八）点[12]
A方四角（中巻）　方に作る須（し）（中巻）
石山寺本『大般涅槃経』治安四年（一〇二四）点[13]
A方道呪術
立本寺蔵『妙法蓮華経』寛治元年（一〇八七）頃点[14]
B法音方（上）便（〈壽慶聖人（九六六年生）点〉（第二十八）
高山寺蔵『大毘盧遮那成仏経疏』長治二年（一一〇四）点
B方に（巻八142）
龍門文庫蔵『仏説六字神呪王経』保元二年（一一五七）点
A呪方（去）（65）
大東急記念文庫蔵『仏説六字神呪王経』應保二年（一一六二）頃点
A呪方（65）
高山寺蔵『大毘盧遮那成仏経』院政期点[15]

A方（去）正（巻五）　方（去）壇（巻五）

高山寺蔵『大毘盧遮那経供養次第法』巻第七〈重文一7〉院政期点[16]

A四方（ホウニシテ）

高野山正智院蔵『仏頂尊勝陀羅尼経』院政期点

A方四角（ホウシカク）（第七紙）

仁和寺蔵『無常講式』鎌倉初期点

B四方（ハウニ）（37）

心空『倭点法華経』嘉慶元年（一三八七）刊本

A順方（シタカテホウニ）治病（セハヲ）（巻二362）

金剛頂寺本『大毘盧遮那成仏経』南北朝期点[17]

A方壇（ホウタン）（巻五）

東寺蔵『大般若経三十二相八十種好』〈第二六箱33号〉鎌倉後期点[18]

A方正（ホウ）（68）

以上、直読資料と同様である。

3字書・音義（呉音系、呉音読部分）

右の呉音資料の実態は、字書・音義でも変わらない。

『和名類聚抄』（二十巻本。元和古活字本）

A方磐〈俗云奉強〉（巻四―九）

『和名類聚抄』（十巻本。室町初期写、伊勢本）（江戸前期写、京本も同一。）

A方磐（ホウキャウ）〈俗云方（去）磐（平）〉（巻六28オ）

図書寮本『類聚名義抄』

A方―（磐）〈順云俗音奉（去）強（平濁）〉（一五六8）

観智院本『類聚名義抄』

A方―（磐）〈俗音ホ（平）ウ（上）キ（平濁）ヤ（平）ウ（平）〉（法中七7）

高山寺蔵『新訳華厳経音義』

B方（ハウ）闡（セン）（平）（二一ウ）

高山寺蔵『貞元華厳経音義』

B省（シヤウ）（上）方（ハウ）（去）（一一オ）

『法華経音義』永和四年（一三七八）写本

B方（ハウ）便

A方（ホウ）医方（下26才）

以下、挙例は省略に従う。[19]

4「方」の日本呉音における音形・声調

右の呉音読資料に見られた音形と声調は、A・Bの意味でそれぞれ以下の通りである。

音形　Aホウ

Bハウ

声調　A去声（上接字の声調の影響により上声（濁））。

B去声（上接字の声調の影響により上声（濁））。

音形は、A四角・医方の意味の場合はホウ、A以外の意味の場合はハウであって、従来指摘されてきた使い分けが明瞭に存する。この原則に合わない例は、右の範囲では、皆無である。

声調は去声である。ただし、直前の字が去声・上声の場合は、声調変化によって上声となることがある。

Ⅱ日本漢音資料における音注の実態

1字音直読資料（漢音系）

ア『蒙求』諸本

長承三年奥書本『蒙求』（左の例では、仮名は長承三年〈一一三四〉点、声点は平安中期点）

B公（ハウ）（平軽）方（ハウ）（平軽）（82）　田（テン）（平）方（ハウ）（平軽）（418）　陰（イム）（平軽）方（ハウ）（平軽）（422）

その他、国立故宮博物館蔵本・聖語蔵本・東洋文庫蔵本・天理図書館蔵道順書写本・同康永四年書写本・真福寺蔵本・国会図書館蔵応永七年刊本・同大永五年書写本・龍谷大学図書館蔵本、いずれも同様である。ただし、東洋文庫蔵本以下には平声の声点加点例も存する。

イ『仏母大孔雀明王経』諸本

①仁和寺蔵本（巻中・下）平安初期末点[20]

A結（入軽軽）方（平軽軽）隅（平軽重）界（去軽軽）（下340）

B東（平軽軽）方（平軽軽）（下188）　南（平軽重）方（平軽軽）（下192）　北（入軽軽）方（平軽軽）（下200）　四（去軽軽）方（平軽軽）各（入軽軽）居（下210）

②大東急記念文庫本（巻下）寛治五年（一〇九一）点

A結（入）方（上）隅（平）界（去）（下355）

B東（平軽）方（平）（下201）　南（平）方（平）（下205）　西（平）方（平軽）（下209）　北（入軽）方（平）（下213）　四（去）方（平軽）各（入）居（平）（下223）

③高山寺本（巻中）院政初期点（第二函第六・七号）

以下、紙幅の都合上、主な例のみ記す。

B諸（平軽）方（ハウ）（113）　十（入）方（平軽）（去）（154）　南（平）方（平軽）（162）

④高山寺本（巻下）院政期点（第一部285号）

A結（入）方（平）隅（平）界（去）（336）　以上、（平）。

B東（平）方（平）（186）　西（平）方（平軽）（194）　など（平）（平軽）。

⑤東寺蔵本院政期点[21]（第一四函第一号）

A方（ハウ）（平軽）主（シュ）（上）（上125）　方（ハウ）（平軽）隅（ク）（平）界（上254）　などハウ（平軽）のみ。

B北（入軽）方（平軽）（上415・416）　東（トウ）（平軽）方（ハウ）（平軽濁）（上426）　などハウ（平軽）（平軽濁）のみ。

⑥東寺蔵本（巻上）院政期朱点・室町期墨点[22]（第一一一函第二〇号）

A方（ホウ、ハウ）（平軽）主（シュ）（上）（125）　方（平軽）隅（平）界（去）（254・372）　などハウ・ホウ（平軽）。ただし、ハウ・ホウは、室町期墨点。

B方（平）（去）（平軽）（148）　東（平軽）方（平軽）（385・387・426）など、（平）（去）（平軽）。

⑦東寺蔵本院政末～鎌倉初期点[23]（第一二函第四号）

A方（ハウ）（平軽）主（シュ）（上）（上125）　方（ハウ）（平軽）隅（ク）（平）界（去）（上372）などハウ（平軽）。

B東（平軽）方（平濁）（上385・387・426）　西（平軽）方（平軽）（上404）など（平軽）（平軽濁）（平）（平濁）。

⑧京都女子大学蔵本（巻中）院政末～鎌倉初期点（KN183・7・B97）

A諸（平軽）方（ハウ）（平）（113）　以上、ハウ（平）。

B東方（ハウ）（平濁）（155）　南（平）方（平軽）（161）　など、ハウ（平軽）（平濁）。

⑨京都国立博物館蔵本鎌倉初期点（B甲166　守屋コレクション）

A方（平軽）隅（平）界（去）（355）　以上、（平軽）。
B東（平）方（平軽）（186）　四（平）方（平）（223）　以上、（平軽）（平）。
⑮国会図書館本元應二年（一三二一）頃点（WA3—12）
A方（平軽）隅（平濁）界（去）（上51・372）　方（平軽）主（上）（上125）
方（平軽）隅（平）界（去）（上254）　などホウ・ハウ（平軽）。
B方（平）（上148）　諸（平軽）方（平）（中113）　東（平軽）方（平濁）（中156）
などハウ（平軽）（平）（平濁）。

以上、A・Bの意味の相違に拘らず、音形がおもにハウである点と、声調がA・Bともに平声軽または平声が多くを占める点が、呉音資料と大きく異なる。しかも、呉音資料に例外なく見られたAの意味の音形ホウは、⑨の鎌倉初期点に初めて現われる。また、声調に関しても、呉音資料に見られた去声（上声）はここでは少数例であり、②⑪⑫のAに上声、去声の例が、③⑥⑨⑫のBに去声の例が見られるのみである。[26]

2 訓読資料（漢音系）

『漢書楊雄伝』天暦二年（九四八）点
B方（平）皇（191）　その他、陽韻の字に対して同音字注字として用いられる。
九条本『古文尚書』平安中期点
B冀方（平軽）（9オ6）　多方（平軽）（31オ4）
岩崎本『日本書紀』（仮名は室町、声点は平安中期点）
A方（去）術（入）（75）

A方（平軽）隅（平）界（去）（上51・240）　方（平軽）主（上）（上119）
などハウ・ホウ（平軽）。
B方（平軽）（去）（上142）　東（平軽）方（平軽濁）（上359）　南（平）（平軽）方（平濁）（上368）　南（平）方（平）（上370）　などハウ（平軽）（平軽濁）（平）（去）。
⑩仁和寺蔵本建久八年（一一九七）頃点（第七二函[24]）
A方（平軽）隅（平）界（去）（上51）　方（平）（平軽）主（上）（上125）
などハウ（平軽）（平）。
B方（平軽）（上148）　諸（平軽）方（平）（中113）　などハウ（平軽）（平）。
⑪東京大学国語研究室蔵本鎌倉中期点（特1・11）
A方（平軽）（去）隅（平濁）界（去）（上62・372）　方（平軽）隅（平濁）界（去）（上84・252）　方（平軽）主（上）（上130）　などホウ・ハウ（平軽）（去）。
B方（平軽）（上153）　東（平軽）方（平）（上369・371）　諸（平軽）方（平）（中118）　東（平軽）方（平濁）（中156）　などハウ（平軽）（平）（平濁）。
⑫東寺蔵本鎌倉中期点[25]（第一五五函第一号）
A方（上）隅（平濁）界（去）（上73）　方（平軽）隅（平濁）界（去）（上372）
などハウ（平軽）（上）。
B方（去）（上148）　西（平）方（平軽）（上416）　東（平軽）方（平軽濁）（上426）　などハウ（平軽）（平軽濁）（去）。
⑬龍門文庫本延慶二年（一三〇九）点（［別］）
A方（平）隅界（去）（上51・372）　方（平軽）隅（平濁）界（去）（上73）
など（平軽）（平）。
B東（平軽）方（平濁）（上385・387・426）　南（平軽）方（平）（上426）　北（入軽）方（平軽）（上415・416）　など（平軽）（平）（平濁）。
⑭金沢文庫本（巻下）鎌倉中期点（216号）

『南海寄帰内法伝』平安後期点
A方（去）帖（二10紙）　方（去）五指（二10紙）
最明寺本『往生要集』十一世紀後半頃点・十二世紀後半頃点
（「　」内は十二世紀後半頃点）
A其の方「ホウ」に曰く「フ」（上43オ）　仙の方「ホウ」に（去）（上43ウ）
（上43ウ）　方「ホウ」圓なる「フ」（中10ウ）
書陵部蔵『文選』巻第二（「管見記」紙背）院政初期点
音房
A方（平）（平軽）（6）　方（平軽）居（344）
音房
B方（平）相（平）（81）
高山寺本『三教指帰』巻中　院政初期点[27]
A方（平）壺（平）（二五ウ6）　方壺（二六オ2）　方底（一二ウ3）
方盡（一三ウ3）　小（上）方（去）（一三オ7）
興福寺蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』承徳三年（一〇九九）点
A方（去）圓（上）（九401）　方（去）隅（上）（八227）　方（平）外（去）（八216）
など。
B遊（平）方（平）（七346）　上（去）方（平軽）（九367）　殊（平軽）方（平）
（八224）　など。
天理図書館蔵『弘決外典鈔』一一〇〇年頃点
A方（去）四十里（119頁割注）
大東急記念文庫蔵『三教治道篇』保安四年（一一二二）点
A方（平軽）士（去）（287）
B五（上）方（平軽）（234）
書陵部蔵『文鏡秘府論』保延四年（一一三八）点
B四方（平軽）（天48）　方老（北60）
石山寺本『大唐西域記』長寛元年（一一六三）点

A依方（去）行—事（する）に（七132）
B方（平軽）—載（去）（一2）　方（平軽）志（去）（一3）
田中勘兵衛蔵『性霊集』治承三年（一一七九）点[28]
A殊方
東京大学国語研究室蔵『秘蔵寶鑰』院政期点
A大（去）方（去）无隅（一一オ）　佛如医王教如方経（二五ウ）　方（平軽）圓（平）（四四オ）
B迷（去）方（上）（一オ）　迷（去）方（平）（三ウ）　方（平軽）諸（五オ）
言（上濁）（四二ウ）
猿投神社蔵『古文孝経』建久六年（一一九五）点
A禁（去）林反（去）方（平軽）（序）
B四（去）方（平軽）（孔氏傳）
高山寺蔵清原本『論語』鎌倉初期点
B人方（第七81）　比（上）（去）—方（第七81）
『古文孝経』建治三年（一二七七）点
A禁（去）方（平軽）（序）
親鸞筆『教行信証』（漢音読部分）
A神（平）方（去）（三5・10）
『白氏文集』巻四　嘉禎四年（一二三八）点
A方（平軽）士（133）
B比（上）方（平軽）（48）　四（上）方（平）（124）
『白氏文集』巻四　正応二年（一二八九）点
A方（平軽）士（去）（193）
B比（上）方（平軽）（97）　四（去）方（平軽）（182）
金沢文庫本『群書治要』建長五年（一二五三）～延慶三年（一三〇八）点
A方（平）圓（平）（三十二169）　方（平軽）七十里（三十九584）　方（平軽）七十里（三十七20）　など。

B方（平軽）（三十三471）　何方（イカナルハウカアル）（三十四356）　など。
猿投神社蔵『本朝文粋』巻十三丙　鎌倉中期点
A方（去）赤（ヤキ）駐老之（ホウラ）方
天理図書館蔵『本朝文粋』巻十三　鎌倉中期点
B十方（去）（一〇四頁）　他（上）方（上）（一二二頁）
梅沢本『新撰朗詠集』鎌倉中期点[29]
A仙―方（去）雪（ホウの）方（ホウと）―術傳（ホウを）（へて）
穂久迩本『新撰朗詠集』鎌倉中期点（「　」内は後筆）
A仙（平）方（去）雪（カト）（上33）　方（平軽）士（ハ）（上）（上65）　方（ホウ）（去）術（ヲ）（入濁）（下118）　方（ハウ）（平軽）寸火（ノヒ）（下120）
B季（キ）（上）方（ハウ）（平）（上24）　方（ハウ）（平軽）干（カム）（平）（上56）
『文選』弘安五年（一二八二）点
A方（ハウ）（平軽）丈（チヤウ）（去）（巻一467）
『文選』正安二年（一三〇二）点
A圓（エン）（平）方（ハウニ）（187）　方壺（ハウコ）（242）
B東方（平）（113）　八方（ハウヲ）（345）　萬方（ハンハウ）（平軽）（387）
六地蔵寺蔵『文鏡秘府論』室町中期点
A方（平軽）圓（平）（北2オ）
B方（ハウ）（平軽）老（上）（北38オ）　東（平軽）方（平）（北37ウ）など。

以上、字音直読資料と大勢は変わらないが、①Aの意味でホウと加点された例が、平安後期からすでに見られる点と、②その際、去声点が加点されることが多い点が、字音直読資料との相違点として指摘できる。[30]

3字書・音義（漢音系、漢音読部分）
醍醐寺本『法華経釈文』平安後期点

B方（平軽）〈府（上）良（亡（平）反〉（上14オ2）
唐招提寺本『孔雀経音義』院政期点
A方（平軽）〈府（平軽）良（平）〉（5ウ）
『孔雀経単字』鎌倉初期点
A方（平軽）（165）
文明本『節用集』朱点
A方（ハウ）（平）丈（チヤウ）（上）（94―7）

以上、A・Bいずれも、ハウ・平声軽（または平声）である。

4「方」の日本漢音における音形・声調

右の、漢音読資料に見られた音形と声調は、以下の通りである。

音形　Aハウ（・ホウ）
　　Bハウ
声調　A平声軽・平声（・去声・上声）
　　B平声軽・平声（・去声・上声）

音形でAの意味にホウが見られる以外は、意味による音の区別は認めがたい。特に、より純粋な日本漢音を伝えていると考えられている字音直読資料の早い時期のものにおいては、Aの意味でのホウの音形は見られない。よって、当初の日本漢音では、「方」の音が意味によって異なるということは無かったものと考えられる。

また、声調は、大部分が平声軽であり、語の中で平声が見られ

ることがある。これは、中国側の切韻以下の声調の反映と考えられる。はじめに見たように、「方」は、中国側の韻書で平声の全清字であり、日本漢音では平声軽となることを原則とする群に属する。[31]

四、日本漢字音における「方」字の音形・声調

これまで、「方」の字音ハウ・ホウは、意味の相違によって使い分けられていることが指摘されていた。しかし、本稿の調査の結果、この意味の相違による使い分けは、呉音資料には見られたが、漢音資料には存しなかった。また、「方」字は、声調においても、呉音：去声（または上声）、漢音：平声軽（または平声）と区別されていたことがわかった。もっとも、時代が降ると漢音読を主とする資料にもAの意味にホウの音形が現れ、去声（または上声）の声点加点例が見られる。しかし、これは、比較的早い例が、字音直読資料よりも多くの呉音を混入する訓読資料に拾われることから、呉音形の混入と考えられる。漢音資料に見られるホウの音形の例には、「方」の呉音声調である去声（または上声）の声点加点が、多くなされていることもこれを裏付ける。

また、この、「方」の呉音・漢音の別による音の相違は、古訓点の加点者にも意識されていたことが、残存資料からうかがえる。

次にその例をあげる。

①久遠寺蔵『本朝文粋』建治二年（一二七六）書写移点

漢音読中心の本資料の音合符には、上下の字の中央に引くものの外に、右寄りに引いて上下の字が呉音読されること示す合符が存することが指摘されている。[32]

「方」字についても、Aの意味の場合に右寄りの「呉音引符」が見られ、原則にかなっている。

A方（ホウ）―座（平濁）（下282）　方―丈（上39）　方―圓（上82）　仙―方（上152）
B方（平軽）―袍（去）（下255）　方―伯（上30）　方―諸（上72）　一―方（上80）

漢音読中心の本資料にあって、「方」がAの意味でホウとなることがあることは先に例をあげたが、右寄りの合符は、その音を、すくなくとも本資料の加点者は、呉音と考えていたことを示している。

②『南北相違抄』鎌倉後期成立

南云　方円（ホウ）　北云　方円（ハウ）（12オ3）（観智院本、室町初期写本。「訓点語と訓点資料」第六五輯による）

『南北相違抄』の「南」が「呉音的」であり、「北」は漢音を含んでいることが報告されている。[33]すると、Aの意味の「方円」を、呉音では「ホウエン」、漢音では「ハウエン」と言うことを

示した記事であると解することができる。

③文明本『節用集』

本資料では、漢音系の字音（いわゆる新漢音・唐音を含む）を朱書で、それ以外の系統の字音と和語とを墨書でかき分ける方針がとられている。[34]

方「ハウ（平）」丈「ヂヤウ（上）」（94―7。「　」内は朱書）

したがって、右例は、Aの意味の「方丈」を呉音では「ホウ――」、漢音では「ハウヂヤウ」と言うことを記していることになる。[35]

この区別が、江戸時代に入ってからのいわゆる開合の区別の消滅、室町時代以降の漢語アクセントの和語アクセント化（「出合」）[36]、単字声調意識の希薄化[37]によって音形・声調ともに失われ、現在に至っている。

五、従来の研究の問題点の検討

以上によって、日本呉音と日本漢音とで「方」の音に相違が見られるという事実が確認された。この事実に基づいて、従来の研究で残された問題について考察を加えてみる。

［問題点1］論の根拠となっている平仮名文献や抄物・キリシタン資料・国語辞書などの用例の中には、ハウ・ホウの使い分けの原則に反する例が少なくない。

従来の研究では、Aの意味の用例を集め、その中でハウと読まれているものを「誤っている」「おかしい」としてきた。

A四角・医方の意味でハウと読まれる用例は、従来の研究では室町時代の抄物・辞書を古い例とするようである。これは、この時代にすでにホウ・ハウの長音化した音が区別されないことがあったことを示す例とも考えられるが、ハウは漢音を記したものであるとみることもできる。すなわち、前節までに見てきたように、日本漢音は、原則として、ハウ・ホウの使い分けをせずハウのみなのであって、その音が室町時代の抄物・辞書のAの意味に現われたと考えることも可能である。先掲の両論文に引かれている前田家本色葉字類抄のハの畳字に「方術」が、イの畳字に「医方イハウ」が存するのも、Aの意味ではあるが漢音ハウを示したものと見れば、「おかしい」例とはならない（ただし、声調は呉音声調の去声（上声）ではあるが）。

院政・鎌倉時代以降、呉音読中心資料・漢音読中心資料にそれぞれ漢音・呉音の混入が多くなる。また、一語中の漢音・呉音の混読も見られるようになる。そのような流れの中で、「方」のAの意味でのハウを捉えなおしてみなければならないと考えるのである。

［問題点2］ハウ・ホウの使い分けは、日本において生まれたとされているが、はたしてそうなのであろうか。

日遠『法華経随音句』には、「方分房切ナレハハウノ音也。（略）然レトモ和国ノ風俗、薬方・方円時ハ、ホウトヨミ、四方・正方ノ時ハ、ハウト用ヰ來レリ。」とある（日相『法華経音義補闕』元禄十一年版にも同様の記事有り）。従来の研究でも、ホウの音が中国の韻書・字書の記述から導かれないことから、我が国で生じた音形であろうとされていた。

しかし、本稿の調査により、ホウが呉音にのみ見られることが明らかになったことから、漢音とくらべて伝来の古い呉音の祖系音に、意味の相違による音の使い分けが存し、漢音の母胎となった唐の長安音ではそれがすでに失われていたという可能性も全く無いとは言えなくなった。高松政雄も前引論文の中で、次のように述べ、中国原音との関係を完全には否定していない。

「方」が、合音形を採ることは、我が豪韻唇音への類推や、また、中国語においても、上古で東韻と合韻すること、及び、近代の或方言でそうなることがあるので、その可能性は考え得る。しかし、これが所属する陽韻中で、これのみが例外となる謂われは不明として留る以外にはない。上代には、万葉仮名で、陽韻字の合音もあり得たけれども。

また、福島邦道は、「甲」の字音カフ・コフについて、「漢呉音ともに、「カフ」とすべきである。「コフ」は呉音の一種であろうが、意味によって使われた特殊な字音と思うのである。」と述べ、「甲」が本稿で検討した「方」とまったく同様な漢呉音の相違を見せる可能性を示唆している。[38] さらに、前田富祺は、「"手の甲"の呼び方について」（『大坪併治教授退官記念国語史論集』所収）のなかで、中国の韻書から導かれるカフではなく、わが国で通用しているコフが、「甲」の原義と対応していることを指摘している。これによれば、コフがより古い音であった可能性が考えられる。

一方、沼本克明は、「厚」の字音について、日本漢字音資料を調査し、日本呉音資料に、中国の韻書・字書には見られないカウの音が存することを報告し、その最後に次のように述べている。[39]

日本漢字音史上における「厚カウ」―呉音、「厚コウ」―漢音、という現象の原因がどこに存るのか、中国上古音、中国中古音、中国方言音、万葉仮名、等の見地からさぐってみたがいまだ思い及ばない。甲、方、等のような例とともになお追及する必要がある。六朝方音の原姿を留める可能性は十分にあろう。

本稿の検討によって、「方」を、日本呉音が『切韻』の音と合わない漢字、に加えることができた。「甲」「厚」とあわせて、日本呉音の祖系音を考える際の手がかりとすることができるのではないかと思われるのである。[40]

六、むすび

日本漢字音の研究は、訓点資料の出現によって新しい時代をむ

かえた。しかし、その活用は、現在のところ、かならずしも容易ではない。かつて、河野六郎は、日本漢字音資料を網羅して整理する必要性を説いた上で、「このような面倒な仕事をしても、結果は労多くして功少なき予感がする」と述べた。[41] 徒労となることが多いであろうが、それを行わなければならないと考えている。

〈注〉

(1)『漢語研究の構想』（岩波書店。一九八四年）に再収。

(2)『語史と方言』（笠間書院。一九八八年）に再収。

(3) 土井忠生「養方軒の当字」（『吉利支丹文献考』〈三省堂。一九六三年〉）も同じ。

(4) ただし、『韻補』に「叶膚容切」とあるは注目される。『韻補』は、南宋の呉棫が上古音について述べた書である。

(5)(6) 沼本克明先生よりお借りした写真版による。

(7) 小林芳規先生からお借りした移点資料による。

(8)「訓点語と訓点資料」第四十四輯による。

(9)(10) 広島大学国語学国文学研究室蔵の紙焼き写真による。

(11) 挙例を省略した春日版法華経・成唯識論、中論偈頌などの声点加点資料でも同様である。

(12)「訓点語と訓点資料」第三輯による。

(13) 大坪併治「石山寺本大般涅槃経の訓点」〈「島根大学論集」六・七〉による。

(14)「訓点語と訓点資料」別刊第四による。

(15)(16) 広島大学国語学国文学研究室蔵の紙焼き写真による。

(17)「訓点語と訓点資料」第五十四輯による。

(18) 広島大学国語学国文学研究室蔵の紙焼き写真による。

(19) 九条本『法華経音』は、巻末「同字随所音訓共替」に方ハウ・ホウを掲げる。心空『法華経音訓』は、「方（ハウ？ホウ）（去）（上）」（15）を記した後、巻末「両音字」にも掲げる。これ以降の法華経諸音義でもほぼ同様の状況である。高松政雄は、「円兄」が「放能反」という反切を作り出してまでホウの音をとどめようとしたことを指摘している（前引論文）。

(20)〜(25) 沼本克明先生からお借りした移点資料による。

(26)『理趣経』諸本、上野本『千字文』弘安十年（一二八七）写本の例も右の状況と変わりはない。

(27) 管原範夫・松本光隆「高山寺本三教指帰巻中院政初期点」〈「訓点語と訓点資料」第八十九輯〉による。

(28) 大矢透『仮名遣及仮名字体沿革史料』による。

(29) 小林芳規「梅沢本新選朗詠集の訓読語について」〈「訓点語と訓点資料」第二十六輯〉による。

(30) その他、挙例は省略したが、『古文尚書』巻十一鎌倉中期点、『古文孝経』弘安二年点、『論語』高山寺蔵清原本鎌倉初期点・猿投神社蔵巻三鎌倉中期点・同巻三康安二年点・同巻七康安二年点・醍醐寺蔵巻七文永五年点・建武四年点、『史記』高山寺蔵周本紀鎌倉初期点、『荘子』高山寺蔵第二十六南北朝期点、『白氏文集』金沢文庫本寛喜三年点・巻三永仁元年点・猿投神社蔵巻三正平七年点・同巻四文和二年・同巻三貞治二年写本・同巻三貞治四年写本・同巻三貞治六年写本、『五行大義』元弘本、『本朝文粋』久遠寺蔵建治二年（一二七六）書写移点・猿投神社蔵巻六鎌倉初期点・同巻十三甲鎌倉中期点・醍醐寺蔵延慶元年写本、高山寺蔵『文鏡秘府論』鎌倉初期点、『弘決外典鈔』金沢文庫本弘安写本、『和漢朗詠註抄』身延文庫蔵鎌倉中期点・伊予切・戊辰切・山城切、『新撰朗詠集』ハーバード大学附属フォッグ美術館蔵鎌倉中期点、観智院本『世俗諺文』鎌倉初期点、京都女子大学蔵『表白集』鎌倉中期点、真福寺本『遊仙窟』文和二年点の加点例もこれに加えることができる。また、大谷大学図書館蔵『三教指帰注集』長承二・三年（一一三三・四）点は、Aの意味は去声、Bの意味は平声の声点が加点し分けられている。

(31) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』九五五頁参照。また、例外的に見られる去声・上声は、呉音声調の混入したものかと思われる。

(32) 柏谷嘉弘「身延本本朝文粋の漢語」（『松村明教授古稀記念国語研究論集』〈明治書院。一九八六年〉所収）。

(33) 高松政雄「南北相違抄」（「国語国文」第四三巻五号）。

(34) 中田祝夫「文明本節用集のために」（『文明本節用集研究並びに索引　影印篇』〈風間書房〉所収）参照。

(35) 観智院本類聚名義抄の、和音にハウ・ホウの両音掲げながら、正音の反切からはハウの音しか導かれないという事実も、これらに加えることができるかも知れない。

(36) 桜井茂治「「出合」考　―アクセント史的考察―」（「国語学研究」第7号）。

(37) 前田富祺「古代における国語アクセント観」（「国語学研究」第6号。一九六六年十月）参照。

(38)「遊仙窟の「玳瑁」の訓について」（「訓点語と訓点資料」第三十二輯）。

(39)「「厚」の開合について」（「国語国文」第四一巻一号。一九七二年一月。後、『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』に修正所収。）

(40) 現在の中国の方言に、「方」の主母音を［o］とする方言があることが報告されている（『漢語方言詞匯』〈北京大学中国語言文学系語言学教研究編、一九六四年〉）。また、九〜十世紀の中国河西方言を伝える『南天竺國菩提達磨禅師観門』に、「方」はAの意味で［pwo］、Bの意味で［pho］で写されている（高田時雄『敦煌資料による中国語史の研究』〈一九八八年。創文社〉による）。その他、同類の資料でも「方」の属する陽類の音の主母音を［o］とするものが少なくなく、その十世紀の河西方言の陽韻（開）の韻母は／ɪc〜／と推定されている（同上書。160〜164頁）。『切韻』の―ng韻尾の脱落にともない主母音がaからoに変化しているのである。これらと同様の現象が、日本呉音の母胎音に起きていた可能性が考えられる。

(41)「「日本呉音」に就いて」（「言語学論叢」最終号、一九七六年三月）。

――比治山女子短期大学助教授――